

ストロー

2024. 1. 13

毎朝、コンビニエンスストアに立ち寄る。牛乳を買うためである。ルーティンのようなものである。この牛乳を買うコンビニをかえた。それまでは、私が店に入ると、店員さんがレジでストローを準備してくれているほどの店だった。「あの人は牛乳を買う人」と決まっていた。

店をかえたため、一からやり直しとなった。リセットである。どうやら、私が訪れる時間帯は、3人体制のようである。一人は、店長らしき人、もう一人は、若くてテキパキとした人、そして、もう一人が、若くてスローな人である。

どの店員さんにあたるかは、その日に行ってみないとわからない。何度か行っているうちに、お三方の特性が見えてきた。私がレジに向かう前に、ストローが用意されることを期待はしていなかった。ところが、前の店と同じような現象が起きた。

3人の中で、一番早くストローを準備するようになったのは、テキパキとした若手だった。レジに行く。「おはようございます」そして、素早くレジを打ち、私のスマホにバーコード読み取り機をかざし、はい終了である。一連の流れがスムーズである。こちらも自然と彼のペースに合わせるようになる。「ありがとうございました」で気持ちよく店を出る。

店長らしき人も、ほどなくしてストローを前もって出してくれるようになった。前述の若手よりは、動きがスローなため、こちらとしてはちょうどよい感じである。せかされることはない。あいさつもよい。

もう一人のスローな若手だが、まず「おはようございます」がない。動きがスローなため、こちらがスマホを出すと、やや遅れての対応となる。バーコード読み取り機を両手で持っている。かえってやりづらくはないのだろうか。問題は、ストローである。私がレジに行く前に、彼の左手にはストローがある。だが、見えないようにしている。そして、私が間違いなく牛乳をレジに出すと、おそるおそるストローを出す。実に彼らしい。「ありがとうございました」はない。

こうだからと言って、不満はない。三者三様である。テキパキとした若手は、私が牛乳を手にする前から、レジにストローを出している。スローな若手は、私が牛乳を手にするのを確認し、まずはストローを左手に持つ。だが、ストローの位置は、レジ台の下である。私からは見えない。対照的である。

毎朝、このお三方のお世話になっている。私の予想よりも早く、ストローが出てくるようになった。まさか、コンビニのマニュアルにあるわけではないだろう。一つの心遣いである。スローな若手のことは、何だか応援したくなる。彼の成長を見守りながら、朝の牛乳を味わいたい。